

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	18 / 2005 / 1-3
タイトル	【緒言】「やぶなべの目」とレッドデータ
著者名	やぶなべ会会長 室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

緒言 「やぶなべの目」とレッドデータ やぶなべ会会長 室谷洋司

ここ数年の間に青森県内の生物に関する重要資料が相次いで発行された。「青森県の希少な野生生物」(通称「青森県 RDB」、2000)と「青森県史・自然編生物」(通称「県史」、2003)がそれで、地球レベルでの自然環境悪化から生物多様性が急速に失われていることと、人間社会において自然環境がいかに大切かを地域レベルでも示したものだといえる。

かつて 1971 年に、世界的に水鳥の生息地が開発で失われていることから「ラムサール条約」で規制し、その後、野生動植物の国際取引を規制する「ワシントン条約」(1973 年)、「生物多様性に関する条約」(1993 年)などと国際的な対応が続いた。しかし、自然環境の地球規模での破壊はとどまることを知らず、一度失われた自然の復元は至難のことで、多様性維持への取り組みは明瞭に見えてこない。十数年前から「地球上では数秒間に 1 種の割合で生物種が絶滅している」といわれているが、地球温暖化に見られる「京都議定書」批准への各国の足並みの乱れなどを見れば、さまざまな条約ができて魂が入らずで、寒々としたものを感じる。

青森県の動植物は何種?……答えは約 1 万 1 千種

私ごとだが、よく自問自答することがある。それは青森県には「植物が何種自生しているか?」あるいは「動物が何種生息しているか?」ということである。自ら、およそ 50 年間にわたって調べてきたチョウであれば 112 種ですと即答できるが、植物、動物全体となれば雲をつかむような話しで答えが出てこない。これは多くの方も同じではないかと思い、最近の文献をもとに表に整理してみた。上記の「県史」にその答えを求めたが明解に示されていない。そこで同書の頁をめくり、あるいは別の文献を参照しながら作ってみたのである。

答えは、現時点で調べられた種類数は、維管束植物が 2485 種で内訳はシダ植物 194 種、種子植物 2291 種。動物は 8408 種+ α で、脊椎動物の陸生のは分かっているが、土の中、水の中などと、あるいは顕微鏡で見なければ同定できないといったあまりにも複雑な世界で、目録などできていない分類群があまりにも多い。コケ、地衣、菌類は、表にあげたレッドデータと比較できないので含めなかった。

当やぶなべ会員の市田忠夫氏は、この複雑多岐にわたる難問に敢然と挑み昆虫類は約 8000 種と割り出した。この 8000 種があるから動物は 8408 種+ α となり、したがって昆虫類を差し引いた動物は 408 種+ α ということになる。「植物、動物合わせて約 1 万 1 千種で、調査が進めばもっと増えるでしょう」、……これが当面の模範解答である。

つぎに、多くの種が絶滅したとか昔は普通に見られたのに、などと多様性が急速に失われているとの嘆きが聞こえてくる。もう一つの「青森県 RDB」の選定種を表に付け加えて考えて

みた。なお、青森県 RDB のまとめには当会の三浦博氏が昆虫類の一部を担当したことを付記しておく。

下表では、県内に自生あるいは生息していた動植物が、健在なのか少なくなってしまったのか、あるいは絶滅してしまったのかが歴然と表れている。「以前は分布していた種」と「現在は絶滅したか、ほとんど見かけない種」との割合は、植物で 10.2%、動物で 4.4%となった。表の補足説明にも書いたが、動物はその 9 割近くを占める昆虫類の調査が不備のため比率が小さくなっている。例えばチョウの場合、112 種のうち 20 種が希少種に数えられ 17.8%になっていて、他の昆虫も同調していることを考えれば、決して安心できる状況ではない。

ちなみに「青森県 RDB」で絶滅種にあげられたのは、植物はヒシモドキ、フサタヌキモ、ヤナギタウコギ、トウゴクヘラオモダカ、カンエンガヤツリ、タチガヤツリで 6 種、動物はニホンオオカミ、ニホンカワウソ、ニホンイノシシ、ホンドジカ、イトウ、トラフトンボ、ムツアカネ、オオルリシジミの 8 種で、合わせて 14 種となっている。

青森県に分布する生物種数とレッドデータ選定種(2000年)の比較一覧

分類項目	分布種	レッドデータ選定種				比率(%)	分布種備考
		E X	A	B~LP	計		
維管束植物合計	2485	6	67	180	253	10.2	細井、1994
①シダ植物	194	0	1	6	7	3.6	同上
②種子植物	2291	6	66	174	246	10.7	同上
動物合計	8408 + α	8	52	311	371	4.4	
脊椎動物計	408 + α	5	22	109	136	33.3	
③哺乳類	約60	4	4	18	26	43.3	
④鳥類	316	0	12	74	86	27.2	青森県、1978
⑤爬虫類	16	0	1	3	4	25.0	
⑥両生類	16	0	0	1	1	6.3	
⑦汽水・淡水魚類	不明	1	5	13	19	?	
無脊椎動物計	8000 + α	3	30	202	235	2.9	
⑧昆虫類	約8000	3	29	187	219	2.7	市田、2003

表の補足説明

【青森県の分布生物種数】

「青森県の希少な野生生物」(2000)と「青森県史・自然編生物」(2003)、ほかを参考にしてまとめた。一部については備考に出典を示した。分類群によっては未解明が多い。

分類群の一連番号に符合させて説明を加える。

③哺乳類は海生種に不明が多い。⑦汽水・淡水魚は何種か見当がつかないのが現状。⑧昆虫類は市田忠夫氏の推計で、全 29 目のうち解明度の大きいのはトンボ、ゴキブリ、カマキリ、シロアリ、バッタ、ナナフシ、ハサ

ミムシ、カメムシ(このなかの異翅亜目)、アミメカゲロウ、シリアゲムシ、チョウ(このなかの蝶類)、ハチ(このうち有剣類)の各目で、ほかの目は 8 割未満、あるいは 5 割未満の解明度としている。⑨クモ目は 218 種(大野・八木沼、1973)の報告があり、プラナリア類は 8 種とされているが、他の分類群では何種か不明。

【青森県レッドデータ選定種】

原著は、6 つのカテゴリーに分けて記している。EX(絶滅野生生物)、A(最重要希少野生生物 A)、B(同 B)、C(希少野生生物)、D(要調査野生生物)、LP(地域限定希少野生生物)である。このうち前 2 ランクが絶滅ないしは殆どそれに近いもので、B 以下は程度の差あるいは地域性を加味したもので、表では単純化して合体させた。2001 年に「青森県 RDB・普及版」が発行され、種子植物の絶滅種 9 種のうち 3 種が再発見された。したがって表では 6 種に修正した。

比率は、分布生物種に対するレッドデータ選定種の占める割合で、哺乳類の 43.3%から昆虫類の 2.7%までバラツキが多い。後者は種類数が極めて多く、しかも 2000 年の発表時点での調査不備を反映したものである。

なお、青森県では 2000 年版の改訂作業を進めており、これにはコケ、地衣、菌類も入る。完成を待つてまた紹介したい。

「やぶなべの目」で郷土の自然環境を見続ける

いま我々が深く考えなければならないのは、多様で豊かな生物環境をいかに持続させるかにあると思う。このためには、半世紀以上にわたって培ってきた「やぶなべの目」の大切なことを痛感する。この目でジックリと見据えてきたものが 1980 年まで 29 号を数えた生物部機関誌「やぶなべ」であったし、今回で 18 号になった「やぶなべ会報」だと思う。本号に後者の総目次を掲げたが、「やぶなべ生態学」や「少年時代の自然環境」「青森のホタル」といった多くの報告には、前掲の表ではうかがい知ることのできない自然環境の変化がありありと描かれている。

会では、これらを CD-R 化して総覧できる仕組みを作り始めているが、これをバネにしながらかれからも郷土の自然環境を考えていきたいものである。

(2005 年 6 月 8 日記)

参考文献

- | | |
|------------|-----------------------|
| 大野正男・八木沼建夫 | 1973、日本産真正蜘蛛類分布資料(3)。 |
| 青森県 | 1978、青森県の鳥獣。 |
| 細井幸兵衛 | 1994、青森県野生生物目録。 |
| 青森県 | 2000、青森県の希少な野生生物。 |
| 青森県 | 2003、青森県史・自然編生物。 |
| 市田忠夫 | 2003、同上の II 章 I 節。 |